

皆で話し合う 『マルコによる福音書』(9) (10)

2006・12・25

マルコによる福音書3章7節〜35節

湖の岸辺の群集

7 イエスは弟子たちと共に湖の方に立ち去られた。ガリラヤから来たおびたらしい群衆が従った。また、ユダヤ、8 エルサレム、イドマヤ、ヨルダン川の向こう側、ティルスやシドンの辺りからおびたらしい群衆が、イエスのしておられることを残らず聞いて、そばに集まってきた。そこで、イエスは弟子たちに小舟を用意してほしいと言われた。群衆に押しつぶされないためである。9 イエスが多くの病人をいやされたので、病気に悩む人たちが皆、イエスに触れようとして、そばに押し寄せたからである。10 汚れた霊どもは、イエスを見るとひれ伏して、あなたは神の子だ」と叫んだ。11 イエスは、自分のことを言いつらさないようにと霊どもを厳しく戒められた。

イエスの時はまだ来ていなかった。イエスはメシアである事の中に、奉仕と犠牲、最後に愛で終わる十字架の道を見ておられた。イエスはメシアを愛という言葉で考えられ、人々はメシアをユダヤ民族主義で考えた。イエスは、ご自分がメシアであると言う宣言をされる前に、メシアは何を意味するかと言う正しい考えに人々を導くように教育されねばならなかった。未成熟な宣言は、イエスの全使命を破壊する恐れがあった。だからイエスは時が来るまであえて危険を冒されなかった。けれども、彼の避けられたものは、単に危険を避けて時を待たただけではなく、退いて祈る為であったのです。その彼のお姿を私たちは心に焼き付けねばなりません。私たちの信仰が辛うじて支えられるのは、活動的な彼ではなく、祈り給う彼によっているからです。あなたの信仰がなくならないように祈る」と言ってくださいるのは マカ 22:32 彼なのです。彼は弟子達を連れて会堂から退かれました。直ぐあとで私たちは、12 弟子の選任を見ます。イエスが弟子を教育される時、一面では彼らを社会から隔絶し避けさせられますが、一面では、まだ未熟なうちに実地に働かされるのです。私たちは、冒分はまだ力がないから実践は何もしない』と言いつ張ってはならない。自己の弱さや罪をたてにとつて、あたかも主に受けいれられていない、主の贖いの死を受け入れることによつて、義とされていまいと云つて奉仕を辞退してはならないのです。主イエスは、手元に置くことによつて、又実地に当たらせる事によつて弟子を教育されます。唯私たちがみずから、はやりたつて外に出る事を重んじすぎではならぬだけです。一体イエス・キリストの弟子教育は何の為だったのでしょうか。この世を次第に良くしてゆく為だったのでしょうか。いいえ、来たらんとする時代に、改まった世において、初めてその真価を發揮するような、新しい人間を彼は創られるのです。神の国」が既に来ているように、神の支配」がこの世でも現実に行なわれているように生きる人間、を創られるのです。

イエスはこうして、海辺に退かれたのですが、おびたらしい人間が彼についてきました。会堂において彼は主であり給うたのですが、その外においていよいよ主であられました。ガリラヤ、ユダヤやエルサレムの人々は当然、イドマヤ、ヨルダンの東、ツロ、シドン、すべて異邦人の地です。だけど、異邦人の地に散らされたユダヤ人であったかもしれませぬ。福

音が異邦人に語られたのは使徒言行録の時代だと聖書に記載されています。これは既に終末的な出来事なのです。残りの者が帰ってくる」(ネザヤ書 10:20)と言われていた。その日」が始まったのです。しかし、群衆が喜びをもつてイエスの許に来たのは正しい意味ではありませんでした。奇跡、癒しを求めてでした。確かに、癒しを行う事もイエスの憐れみによってでした。でもイエスは群衆から離れて祈らねばならなかった。十二弟子を選ばねばならなかった。奇跡を求める群衆の希望に応えることは、イエスの第一目的ではなかった。彼は「神の国」が来ている事を宣言する為に来ておられたのです。私たちもその「神の支配」を喜んで受けないなら、イエスの十字架によって私たちの「罪が償われた事」をハッキリ捉えて、神の前にひれ伏していかないなら、十字架は躓きとなり、イエス・キリストの復活は私たちに幻となり、復活のキリストと私たちとの関係は力の源泉となり得ないのです。しかし、目前の、押し迫り癒しを求める人たちへの愛が、イエスを、癒しの働きへと動かせるのです。そして「神の子」を叫ぶ悪霊に向かつては、尚キリストの秘密を守るように「黙れ」と命じられるのです。彼の事を「神の子」と明かすのは、み心にかななつた者でなければなりません。

《十二人を選ぶ》(マタイ 10:1-4、ルカ 6:12-16)

13 イエスが山に登って、これと思う人々を呼び寄せられると、彼らは直ぐそばに集まって来た。14 そこで、十二人を任命し、使徒と名づけられた。彼らを自分のそばに置くため、また、派遣して宣教させ、15 悪霊を追い出す権能を持たせるためであった。16 こうして十二人を任命された。シモンにはペテロと言う名を付けられた。17 ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネ、この2人にはボアネルゲス、すなわち「雷の子ら」と言う名を付けられた。18 アンデレ、フィリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルファイの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモン、19 それに、イスカリオテのユダ。このユダがイエスを裏切ったのである。

イエスは山に登られました。中二人」を創りだす為に。後のキリスト共同体の初まりです。山の上では勿論、イエスの祈りから始まりました。昔モーセはシナイ山に登り、神から古き律法が与えられ、雑然たる十二部族の集団に過ぎなかった群衆が、シナイという山において一つの団結に編成されました。それにもまして、厳粛な時が来たのです。市川師は「中二人の創設」と言う言葉を使っておられます。マルコでも、その人たちに「使徒」と言う言葉を使っていますが、*「遣わされた者たち」*とか「使者たち」の意味であろうと言われています。目的は、第一に、自分の傍に置いてイエスと生活を共にし、イエスの中に来ている「神の支配」を経験させ、諸民族に述べ伝える為であり、彼らが伝えた内容が伝承され結集されて四つの福音書となり、今日の我々もイエスの言葉と業に接する事が出来る)、第二に、必然的に、彼ら弟子の使命は、*「遣わされて、神の国を宣べ伝える」*ことによる。所で「神の国を宣べ伝える」ことと「悪霊を追い出す」ことの二つは、イエスの働きを要約して述べる時には、いつも一対で用いられる表現である。このことから、イエスが「中二人を創設された」のは、彼らをいつも自分と一緒にいらせてご自身の業の目撃証人とするだけでなく、ご自身がおられるのと同じ業を彼らにもさせ、彼らをご自分の働きの継承者とするためであった事が分かる。

どのような12人であったか? いつも「中二人」の筆頭に來るのがシモン・ペテロである。ヘブル名は「シメオン」であるが、ギリシャ音読みで「シモン」と呼ばれていた。「バルヨナ」と呼ばれている(マタイ 16:17)ことから、「ヨナの子」或いは「ヨハネの子」である事が分かる。

アンデレの兄弟である。ペテロは既に結婚していて恐らく子どももあつたであろう。イエスは彼に「ケパ」という名 アラム語で岩）を与えておられる。もうひとり、マタイを取り上げましょう。この人が取税人であつたことはレビの所で取り上げた。タダイの名はルカのリストには無く、代わりに ヤコブの子ユダ」があげられている。十二人の中に心人のユダがいたことは確かであると考えられ、『ヘネ 14: 22』同名の者がいる時には副名を用いて区別するので、ルカは本名を伝え、マルコとマタイは副名のタダイを用いたと思われる。彼らの出身や経歴を見ると、漁師や取税人や熱心党員というように様々な職業や違った立場の人たちが混じっている。その中に律法学者はいない。イエスは「無学な只の人」 地の民」を選んで新しいイスラエル、まことの神の民を創設される。イエスの魅力と勇気を弟子は受け継いで働く。（ここまでは市川喜一師のご著書を紹介しながら記しました）。

現在の弟子たち、すなわち私たちも同じようにイエスからの選びが与えられるのです。先ず第一に私が決断するのではなくて、イエスの選びが先にあるのです。マタイによる福音書の「山上の説教」で述べられたのは、単なる道徳ではありません。新しい人間の規範が述べられたのではないのです。キリストと共に新しい世が開け、新しい人が生まれた、その新しく創られた人間の新しく創られる道程はこうなるよと説かれたのです。この山で、主キリストは御心になつた者を召されました。その人は「良き聞こえ」のある者で無く、積極的服従を申し出ている者でもなく、宗教的な天賦の才のある者でもなく、ただ、彼、イエスが「私のもとに来よ」と言われただけの者なのです。イエスの栄光ある意志だけがすべてです。人類の中から優秀な者だけを選びすぎて教会を創り給うたなら、その教会はこの世よりいくらか高い水準を保つでしょう。でもやがてこの世が過ぎ去る時、高い水準の教会も滅び去ります。主はこの世と別な水準をお持ちなのです。それが神の国の原理であり、彼の御意志なのです。新しいのちに生きる人間の生き方とは、心の霊を新たにして作り変えられ、何が神のみむねであるか、何が善であつて神に喜ばれ、かつ全きことであるかを弁え知る」ことである、とロマ書12章にあります。このようにして12使徒は立てられました。（ここまでは渡辺宣夫師のマルコ福音書講解説教集による）

彼らはイエスのお傍に置かれました。それは決して親衛隊という意味ではありません。生活を共にする事によって、全人格的な教育をすることでもありません。それは彼らに続く者、——私たちを含めて——召された者たちが「主と共にある」為なのです。積極的に世に出て行く事も大切です。だが、ぶどうの枝がその幹に繋がっているのを大切にすることを大切にする事の方が大切なのです。今は降臨節です。オンマヌエル」イエスがお生まれになられた時です。ご存知のように、インマヌエルは「神様は我々と共におられる」と言う意味です。すべての人間には、神が共にあってくださる、終わりの時がやってきているのです。それは12弟子が、イエスの傍に置かれただけではなく、宣教の為に遣わされるといふ使命が与えられたように、インマヌエル・イエスが来られた事を信じる者には、「神の国」に関わる為に、宣教のわざが与えられるのです。宣教のわざ、難しいようですが、私はイエスの十字架に救われた」と明らかに言う事ではないでしょうか。実に簡単ですね。でも宣教は単に「神の国」を告げ知らせるだけではなく、「神の国」を現臨させるのである、と言われると困惑します。悪霊を追い出すのは、神の支配が、隠されてはいるが力を持って来ている事を、顕にするしです。これは単に悪霊に憑かれた悲惨な人々を助ける社会事業ではありません。そのような愛の事業を積み重ねてゆけば、社会の問題はなくなつて、神の国が実現すると言うのでもありません。

神の国は始まっているのです。その愛を踵にするのが使徒のつとめです。だがその実行には彼ら自身の力ではなく、神の力、主からの権威を頂かなければなりません。福音を霊の力をもって述べ伝える権威を持った使徒を、イエス・キリストが立て給うのです。

所で、私たちの教会の事を振り返ってみましょう。使徒である12人の集団ですら実に雑多な集団である事を感じますね。この人間的なあらゆる弱さを含んだ十二人の集団は、私たちの教会の縮図です。そしてその中に、イスカリオテのユダがいたのです。私たちもユダになる危険性を持つのでしょうか。剣呑剣呑。

私たちは、選ばれた者の歩む道の厳しさを考えます。召し給うた主の意志に全面的に服従しましょう。かつて12人の使徒を立てて、それを教会の礎とし給うた主は、今私たちをその教会に召し、終末的事態に中で共に生きて下さるのです。私の思っている『終末は来ている』事が十分に述べ切れないと残念に思いますが、お許しください。

さて3章のベルゼブル論争で終わりの方、

28はつきり言っておく。人の子らが犯す罪やどんな冒流の言葉も、すべて赦される。29しかし、**聖霊を冒流する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う**」30イエスがこう言われたのは、**彼は汚れた霊に取りつかれている**」と人々が言っていたからである。について一言言っておきたい。

主は、ハツキリ言っておく。すなわち、**アーメン**と言われるのです。先ず罪が赦される。**アーメン**。神を汚す言葉も赦される。**アーメン**。不思議ですね。更にマタイにおける並行記事では、**父の子に言い逆らう者も赦される。アーメン**。十字架のキリストに逆らっても尚、赦しの恵みは追い迫ってくる。**だが、聖霊を汚す罪は赦されない**。何故ならイエス・キリストにある赦しを私たちのものと確認して下さるのは、聖霊の力によるからです。それ故、聖霊への冒流は、赦しとの絶縁を来させるのです。人々が十字架の恩寵以前に陥っていた。父なる神の赦しからの切り離しを自ら承認してしまう事なのです。それは律法学者に発せられた警告です。だが、キリスト者はここに、更に厳重な警告を聞かねばなりません。何故なら、**1コリント12…3**に言うように、**イエスは主である**」との告白をさせる御霊が私たちに与えられており、**ヘブライ人への手紙10…19**に言うように、**恵みの御霊を受けた後もこれを侮る者には、更に厳しい刑罰が望む**」からです。

3章31節以下には、**イエスとその母、その兄弟との関係が出てきます**。私の母、私の兄弟…それは誰の事か、とイエスはお尋ねになります。何と非情な、と入門当時は感じました。でもイエスと私たちの関係は、誰の介入も赦さない真剣な関係なのです。パウロは、かつてはキリストを肉によって知っていたとしても今はそのような知り方をするまい」**11コリント5…16**）と言っています。それでは何によって知ることか。——霊によって知ることです。霊によって、とは、精神的に理解する事とまったく別です。又非現実的と言うのとは全く逆です。霊によってという事こそ現実なのです。だからパウロは、**父もしキリストにあらば新たに創られたるなり**。古きは既に過ぎ去り、見よ、新しくなりたり」と叫んだのです。神の御心を行なうものが神の家の家族だとイエスは云われたのですが、信仰は観念や理解だけでなく、現実です。だが現実の行いとは何でしょう。突き詰めて云うならば、**イエス・キリストが私たちの中に、私たちの兄弟として入ってこられて救いのみ業を行い給うたこと、そのみわざが現実となっているのです**。行なうとは信じること、御心とは救いなのです。

